伝説の作り方

プラセオジム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
伝説の作り方

【Ｎコード】
Ｎ７３０１Ｚ

【作者名】
プラセオジム

【あらすじ】
「この状況、俺は小屋の中、周りはすべて敵に囲まれている、目の前にはこの大勢を率いるボス、俺の手には刀一つ……まさに夢にまで見た光景だ」
孤高の大罪人であり奇人のアーサーはただひたすらに無秩序で我侭な人生を謳歌する。

プロローグ

「この状況、俺は小屋の中、周りはすべて敵に囲まれている、目の前にはこの大勢を率いるボス、俺の手には刀一つ……まさに夢にまで見た光景だ」

青年がその絶体絶命な状況にもかかわらず、そのシチュエーションにおもわず涎を零していた。

名はアーサー、赤い髪に赤い目が特徴の青年だ。

「余裕ぶっている場合なのか、この場合は……」

対するアーサーの前に立つ初老の男はその余裕さに呆れつつも何か隠しているのではと全力で警戒にあたっている。

「だってよう、考えてもみなって、こんな状況味わえるのは漫画の主人公くらいなもんだぜ、それを今ま
さに俺が味わっている、ゾクゾクするね」

アーサーはまたこの状況に興奮し身を震わすと初老の男に刀を向ける。

「あんたは主人公じゃなく悪役だろう、それに対する俺がヒーローってとこかな」

初老の男は少し口元を綻ばすと、次の瞬間には気を引き締め真剣な顔つきになり手の刀をアーサーの方に向ける。

「やっぱりお前も物語好きなんだろ、普通隊長ならこんな前まで出

て来ず後ろで指示を出すもんじゃないのか」
「確かに架空のお話も好きだけどねぇ、これは単に俺が後ろでふんぞり返ってちゃあ部下に示しが付かないと思っての行動ってだけなんだけさ」

初老の男が軽く片手を挙げる、それを合図に後ろに居る部下達が刀を抜く。

「さあ、終わりさアーサー、お前の罪は百を超えている、法廷に突き出すまでも無く死刑さ」

初老の男が一歩前に出る。
アーサーと初老の男との距離は5メートル、あと一歩でも近づけば互いの攻撃範囲内。

「残念でした、俺はどうやらまだ生かされるらしい」

アーサーは刀を大きく振りかぶる。
初老の男はその隙だらけな構えを見逃さず素早く踏み込みアーサーに突きを繰り出す。

「周りはよーく見ましょうね」

初老の男が踏み出した場所、そこは床が腐っていて足が着くと同時に床が抜け体勢を崩した。

「はい、隙だらけぇ」

アーサーはそういい大きく振りかぶっていた刀を振り下ろした。
それは大げさに振りかぶっていた分力が乗り初老の男を切り裂い

た。

「軍隊ならうろたえるなよな、そっちも隙だらけだ」

隊長の死に動揺している間にその中でも前に出ていた部下達三人を切り伏せた。

アーサーは手に持っていた刀を捨て倒した男の刀を手に取る。

「もう満足だ後は好きにして良いぜぇ」

アーサーはそう大声で叫んだ、すると囲んでいた部下達の中から悲鳴が聞こえる。

周りに潜んでいたアーサーの部下達が合図を聞くと同時に物陰や隣家から飛び出し、初老の男の部下達を切り裂いていた。

「そんな馬鹿な、アーサーは常に単独行動のはず部下が居るなんて聞いてないぞ」

どこからかそんな声が悲痛そうに聞こえてきた、アーサーの部下は最初は数こそ負けていたが、動揺していたことと不意を突けたこともあり、すでに数では勝るほどになっている。

「悪いなぁ、俺は常に部下と一緒だぜ、ただなぁ部下と居るところを見た奴は残らず切り刻むことにしているんだ、人に見られてもいいのは単独行動の時のみ、これが孤高の大罪人の秘密さ」

アーサーがそう言った時にはすでに相手はすでにこちらの半数以下であり皆がただひたすらに自分の不幸を嘆くばかりだった。

「一人も逃がすなよ、このアーサー様はあくまで孤高の大罪人、こ

の称号は動きやすいし、それに響きがちょっと気に入ってんだからよ」

そうとだけ指示を飛ばすと小屋を抜け逃げ残った奴は居ないかと確認に周っていく。

そのアーサーの下に部下が一人駆け寄っていく。

「アーサー様、さすがにここまで派手にやられてはさすがに単独犯とは思はないのでは」

部下のその発言にも、一切の迷いも無く答える

「それなら気にするな、すでに俺様の伝説は一人歩きしてまさに化物あつかい、これくらいは本当か嘘かもわからない伝説くらいに思うさ、それより念のためこの村は焼いておけ、もし生き残りがいれば伝説はそれまでだからな」

アーサーは最後にそれだけを言うと村の入り口へと向かった。

背後では最後の一人の悲鳴も止みすでに村を焼く準備にかかっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7301z/

伝説の作り方

2011年12月24日06時46分発行